13 特
門 文 S
號 459
表 23

消印

重修真書太閤記三編卷之七

前田蒲生父子を降参をしむる事

并信長蒲生父子ふ對面の事

神戸藏人具盛前田孫四郎兩人信長の使者とゝく蒲生下野入道同じく右兵衛大夫父子乃籠もる日野城へ赴き寄手の大將柴田の陣ゑ入信長の仰を述しかバ勝家佐々蜂屋ふその旨を傳へ仕寄を操下攻口を引退きて陣をとる終ゞ兩使日野の城下ふいゝ先神戸藏人城門ゑ案内し新公方義昭君の御使として參向しかつ信長より前田孫四郎を差遣そられ

同政會印

いふよりをゝ入けるに右兵衛大夫されを聞て神戸
を義ふ背き北畠と棄くみる無道人なり面會て
何うをん前田を信長の使といふされまゝ逢さる
無益あり兩人とも追返せと云けるを下野入道
ちゞと引とゞめ神戸を元來親しき中なまゝる
去年以來互ふ不快して音信を通ゞ然れども
新公方家の御使といへば尋常の往來とおもゝべ
前田も信長より此使といふ兩陣の間り使節の
禮ゆり無下ふ追却したらんハ軍陣の禮を知
ざるに似たりいづれにても呼入その述る処乃詞を
聞て返答ハ時宜よるべしとゝ勢しあるを

右兵衛大夫も最と同心し即城門を開く兩人を請ゞ
よりて兩人もそゝふ本丸ふ登りもあハ蒲生父子出迎ふ
く對面の時ふ神戸具盛ゆさされけるハ前將軍
義輝公三好松永等の爲ふ御生害まゝ累代の
御所兵火ふ燒失し公達まゝ爰彼まて終焉あふを
らるゝと誰うあれを悽愴ざらん誰ゝ逆を誅して順ふ
歸をんとをおもゝるべき新公方家隱遁の御身なゞら
流石骨肉同胞の恩愛とゝいひかゝハ御母堂ふゞく暴逆の
煙と立のゞくせられし哀痛の所より閑散乃扉
を出御ゆ結し義兵を催促あされ御上洛ありて逆臣を
誅伐し母君兄君御連枝の冥苦を得脫をられんとの

御本意まてよれるので御出陣まて満年処あり蒲生乃
家ハ數代相續の舊家みな〳〵武勇世ゝ聞えゝり就中
石兵衛大夫事勇猛絶倫のよし久〳〵上聞ふ達ひ〳〵
逆臣與力の志を變じ忠勤同心の勞を顯さし名譽を
天下後世ふ傳えられいもぐ莫大乃忠孝あるべきみこゝ
とやを時前田席をそめく新公方家の御催促ふ從ひ
主ひ〳〵ふ信長ゟ分國の軍兵を引率して御先ふ供奉
仕りてい御上洛の路次當國ふかゝるへい逆臣與力伐
退治して御路を開き奉らんと為不慮ゝ當城へ
軍兵を差むけい事弓矢の義理のぐるゝ道なゝふ
去なゝ〳〵新公方家より當城へ上使を立られ御招き

ある上を信長私の合戰ふ及ぶへき道理あゝい速ふ
義兵同心ひゝをられ柳營再興の大勲功を立ふはんと
信長ふ於ゝも祝着極りゝふとやをしかい下野入道
熟思案して兩使ふ向ひ不肖の某父子事何ふて上聞
ふ達をやらん近比憚ゝ多きとふ存ひその上數ゝ
引矢の藝ふより御陣頭へ糸上仕るへき旨御懇れ
上意を蒙りい事家の面目先祖の光武門の規摸
られふ過ぎい神速ふ御請やへきようい得ども
某家代〻佐〻木六角の旗下として若干の所領と
安堵仕りい上を公方の御恩ゟ六角家の舊好も
いづれを勝劣を存をに佐〻木六角當今信長のゝめふ

居城を退出し存亡の實をたしかに承りゐるべくこの時節まかりなりて多年のあらましを棄新公方家の御陣へなべて獨伺候仕りゐるべきたるべき後指をさすべきいえんや織田家より攻詰られ勝敗いまだしかあらざるに上意を幸とし軍を止めいたんを臆病の至といえれんも口惜くゐへば我ら父子も六角と存亡をひとしく仕りゐへく思切てゐさいの由を以て御披露あるべくゐとやけるる時嫡子右兵衛大夫も同じく父ちゝ条より從ふより外別の所存なくゐとやゝ切こゐ上をそやく出城あらく然るべしとゝをば神戸前田まむらひ父子乃心底かこの如き上を別まゝ勸まるにも及ぶまゝ然ばそやく出城して父子の返答を新公方家へ言上に及ぶべきにくゐ定めく御邊まも異儀なるべきとつゝば前田何さゐ天道を知に誠の忠義を弁へめのれまゝ詞を費まもも無益の事なりいまるも御同心ゝ出城仕るべくゐとて既ゝその座を立んとなりける時右兵衛大夫心中大ゝ怒り問も益なきことなるべども我等父子天道をしらに誠の忠義を弁へべとゝハ何事ぞやゝ我の理分明あるべくハ無事に返さべといふ前田まもも動ぜる色なく静ゝ座席ゝ居着て貴殿父子佐〻木家ハ當國の守護なるゝゝそれゝ忠義を盡さるゝを大丈夫の道とあるまゝ由近比以く笑止千萬まてゐ抑佐〻木家の當國り

守護することハ何ものゝ誰か補任してぞ六角は
先祖判官時信父子足利尊氏卿に従ひ莫大の勲功
を立當國の守護職を賜ハりしより以来代々乃職を
相續し承禎入道乃父彈正少弼定頼ハ前將軍義晴公
の御恩によりて北陸道の總管領まなり上りおよ
故將軍義輝公御元服乃時ハ家に例あき加冠乃
役を勤めしを諸家の競望する処なりて是より
家門の繁榮わとりんど將軍御一族に等しきに
なり是ハ誰人の芳恩ぞやその恩ふそむき亡父の
忠功を蔑如し三好松永に一味同心なりて權花
朝の榮をなのるむ六角ハ父祖に不孝の子孫と

いふべく君臣上下の道を弁へざる無道人なり然るを
御邊等善と悪とをもいそぐ只旗頭に従ふを忠義を
あるものと天道を知ざるにあらずや誠の忠義を
弁ざるふびんやいやゝ信長新公方家の御詞に
よりて悪逆無道の亂臣賊子を誅罰をんげた免
美濃尾張伊勢三河の軍勢を引率し御上洛乃
御供して當國に入る所承禎父子御迎まも來上をば
あやつさく和田山箕作に要害をかまへ御先を遮り
止めんとて信長止ることを得ず軍兵をさゝ向ゝ
一日さらゝ兩城なちまちに落去仕りてこれ天道
人望のあるもの所にて全く信長の鋒の強き故に

ひたぶる我が勢破竹の如きに聞怖して六角も居城
観音寺を開これ此へ心中あハ無道ふ與きりとを
後悔あり〳〵と知るとうり御邊の家さうわど六角ハ
恩深く代〳〵の好あり〳〵べ何とて六角ゞ天ふ背き人ふ
違ふとば知らぬ顔して諫り〳〵ふそぐるるや諫るて
げるを以〳〵あ〳〵バ天道の歸する処忠義の赴くまとあ
理を知るそぐるなるべ〳〵新公方家の御軍勢ゝ
きべ〳〵天ふ向ふ〳〵罰を行ふ兵なれバ向ふ処と
しるるは〳〵ふ敵〳〵ふ守山の種村大藏
討ふ〳〵何の名譽ふる不義の戰ふ粉骨を盡〳〵
罪科なき妻子を失ふと可愛きことなる〳〵ぞや

新公方家元より佐〳〵木六角を惡〳〵ぞ思召ふ〳〵ず
只今ゝるあ程先非を悔〳〵御陣へ參上あんゝは
爭〳〵ゝ御勘當あるべ蒲生父子六角をかゝるを
ゝ〳〵バ〳〵ゝ〳〵承禎父子を諫〳〵三好一味の逆意を
翻ゑ〳〵父祖の忠勤を相續ふさ〳〵めゝらんさ〳〵
只今六角と共ゝ存亡を同〳〵ゝ〳〵せ〳〵ゝるふゝる增り
なる勲功といつ〳〵ゝ〳〵ゝ然るを父子ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ趣ゝて
ゝ兎ゝる角ゝ六角の旗下ゝ從ふ〳〵ゝ〳〵ゝ下知ふ
さ〳〵違ゝ〳〵ゝ忠義と思ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ聞ゝ〳〵ゝ但蒲生の
先祖瀧口惟俊勲功の賞ふ蒲生の郡を拜領ありと
聞ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ代〳〵相續ふ〳〵ゝ〳〵ゝ何ゝ〳〵ゝ佐〳〵木の

恩分とハいへき尊氏將軍佐々木の家を賞翫あり
かハ國人ゝかその家隷と同一樣ゝ思被思て過しゆふ
なれ是又將軍家重恩のいゝもとゝ申ぶ一その恩を
おもゝぢるハ人ゝ〳〵人ふあ〳〵ぢる処ゝ然ハ六角も
うのまゝにく道ゝそで終ゝ首をのべく降参するゝ
まゝハ御敵とゝなりそはゝて戰場の土と朽果ふゝ
二川の間をゝも出一心をゝ川めて初中後をおもひめゝと
申ひゝは蒲生父子心中醉るゝ如く默然とゝ
ゝそ〳〵ハ言葉をゝも出さぶゝ〳〵ありて右兵衛大夫申
けるハ使者のいゝゝ趣道理至極ゝ覺えひ我〳〵
ゝあより三好松永ゝ一味をゝにあ〳〵ぶ當將軍

義榮公より御教書のおりゝるゝより新公方家を背き
奉り命をハ塵芥よりもかるく思ひ忠義を盤石ゝ
重〳〵と定め籠城ゝ及びぬれども今更おもひかへ
當將軍とゝふゝも逆臣三好松永ゝ主君とゝ〳〵奉り
処ゝておそ〳〵はゝをば何とゝてその御教書を重んじ
申べき然バ何とゝてか我〳〵父子の忠義ゝたち家を
城をゝも全く仕るゝき御邊の思慮ゝ〳〵ハ子細ゝ述ゝる
へきかとゝふゝより前田ゝ〳〵〳〵申けるゝ〳〳〳〳
信長より某を使節ゝ差越れ〳〳あれゝく新公方家の
御諚ゝ從ひゝはゝ即天道ゝ應ぜるゝ所〳〳ぞや
逆を去ゝく順ゝ歸〳〳ふゝ〳〳れ人望ゝ從ふゝ〳〳ぶや

佐々木家の存亡ハ御邊父子の心中ふあるべし能く思案あるべしやといふ下野入道も手を拍てえじめく夢の醒たる如き思ひをなし此上ハ新公方家の御諚ふまかせ神速ふ御陣頭へ参上仕り信長の處分ふ従ひ便宜を伺ふ六角の家の断絶ぞうん様ふ下なりゆひあば家のため守護乃たゞ兩全乃謀あるべし但父子相共ふ参向をんも餘ふ思慮なふ似たりとづ右兵衛大夫御使ふ打連参上仕るべしとありける石どふ賢秀も異儀をゆに及ぶ前田乃もろひ只今御聞の如く父ふそひ下野入道御味方ふ赤り加る上ハそれ子として何条別義をゆひべき

やうく參上仕るべきうてゆとゆて兩使をばゆづ返しけと神戸前田ハ觀音寺へ立歸りあのひのまくに蒲生父子を說ゆきうりける趣を言上して待ふ程なく右兵衛奏賢秀その子鶴千代とゝく今年十三歳なりけるを伴ふく觀音寺へ来りしかば信長大ふ悦ぶれ早ゝ本丸へ迎えいれ對面ありて神速ふ新公方家御諚乃従ふれゆ事左ふ悦ぶを給ふんぞうめ頓て召出もなるべし信長ふ於ては大慶ふて過ぐその故如何ふとゆふ某が先祖將軍貞盛御邊の先祖秀郷朝臣と同心ゝく相馬の將門を討ゝ吉例あれバ逆臣誅罰を廻ぐらぐと懇ふ宣ひその上ゝく鶴千代ハ器量世ふ勝れ

とを褒美あさなき信長の娘の壻とかの べき由を
契約ありかゝ鶴千代を忠三郎と改名をなさむ
仰含られ ける 彈正忠の一字を分れ ける 誇ありと
宣てをそれ右兵衛大夫心中ふ深く喜ひ聞しに増る
大將 ないぐさ ば 此人の あ ふ二心 ふ く 忠勤を勵
大功を立 んのよとあり ひ 染 ま 中
蒲生參議氏郷卿弘治二年丙辰歲の誕生今年永禄
十一年戊辰十三歲 ありけるを信長深く喜ひ ふ く
岐阜乃城 り 止 られ息女の壻 ふこの
息女ハ信孝の妹 ば 今年十一歲 を
よや

前田孫四郎政名の事
并新公方家江州御動座の事

日野の城強く寄手 手 敗軍 疵を蒙る
多くたゝ 落去 見 ける 木下
謀 より神戸藏人具盛前田孫四郎兩人を使節
蒲生父子を招 られ ふ兩人 天道順逆
乃理を述 諭 ば蒲生父子
その理 服 早く觀音寺山へ上 信長 對面
新公方家の御諚 從ひ三好退治の先陣を勤
肯御請申 ば長光寺草津の砦 籠 輩
力戮落 觀音寺を開城 承禎入道父子の行衛

たゝかひにさきをゝと頼みたり蒲生父子も降参して
觀音寺へ出仕しけるきゝ今も叶ふまじとて皆く城を
明く退去し山林へ身をかくしたゝかどよ湖水を隔てし
西近江宇治山堅田その外乃城くよりまゐりしもの
宇治山とゝのゝ今滋賀郡木戸村古城のことゝ
いへり城主を宇治山越前守とゝ
織田殿の軍威さかんなるゝ利刀の竹筒を破るごとき勢ひ
と聞いまゝ敵乃旗の手を見ばるゝ降参せばゝ佐々木
六角の枝城十八ヶ処たゞ三日の内に落去して江南江西
一時に平均に信長ときゝ感賞ありけるゝ江州かゝの如く
暫時に味方に屬すると全く箕作和田山を一日に

攻落せし武功と日野の蒲生を味方とゝをし智弁ゝ
頼り但箕作和田山軍功の賞ハ後日に行るべし然らハ
まづ前田孫四郎の大勲功を賞をらるべし我のそじめ
覺束なく思召されしかゝの如く功を立しと不思議の
深智と云へく然も平日言寡なゝ物静かなる性質
あるかその勇ハ萬夫不當と賞をべく我の智ハ千百不敵
と稱に足りされよりのち孫四郎を又左衛門尉と改む
べしと我く仰られける
一書に孫四郎を又左衛門尉と改められハ桶迫合戦
の前ありといひこの時の恩賞ハ赤母衣をゆる
されしともいふやや但母衣武者を定めしことハ

永禄十年十月のこと、織田家譜に見へたり。扨の交名も異同あるまゝ世に伝ふ処を前田利家飯尾隠岐守織田越前守黒田次右衛門尉原田備中守毛利河内守福富平左衛門尉猪子内匠助野々村三十郎九人ありとのひ北陸七國志に云処同し。信長武鑑にも金森又四郎黒田次兵衛尉青木所右衛門尉太田和泉守梶原勝兵衛尉森三左衛門尉飯沼勘平野村源十郎猪子加助平手監物荒川新八十一人を加へ織田越前守福富平左衛門を除きそべて十八人といへり。母衣いの七町を用ゐたるそ

猶御感のあまり前田の本家を相續をゝせられたり

流布本此条訛謬多し。北陸七國志に利家舎兄前田蔵人利久を父縫殿助利春の遺跡を續ぎ尾州荒子を領せられるゝ一方の大將となるべきはずなれ共永禄十一年信長の命あり利久の所領を利家に賜はり嫡家に我くなされあるといへば利久の所領を受繼ぎ十一年あるとは信ぜべし。利久武功ありしゆへ故に早く隠居させられしとあるは誤なるべし。利久男子なし。瀧川儀大夫の弟慶次郎利大を養ひ子となす然るに信長の命あり利家をして嗣らあらかば慶次郎利大尾州を去り浪人をその傳はあるに與るべ依りてこれを削る

然も信長観音寺の城を本陣とゐ〜江南と〜く切従へ玉ひ今ゐ京都まで乃路開けたれで新公方家を迎え奉るべ〜とそ不破河内守と濃州へ遣し西の庄立政寺ゐゐ〜滝川と義昭君へ江州軍の次第をとゝめとゐ〜ゐゐ御動座まし〜て然るべく存そるゐゐり某を御迎のゝため参らせい由言上ゐ及び〜かバ新公方家聞食さ御悦喜かきり那く三年ゐ抽の間御心を悩ましられけ乃御本意かゝるもゐく路開けるんとゐかけてゐも思召よ〜ざりきゐ〜江州軍の始末よりもぞ信長の軍配のゐる処ゐきを御感ありて然ハ片時も猶豫あるへゝ〜ぶと抽ゐゐ〜ゐ御用意ゐきをられ同月

廿一日立政寺を御發駕まし〜て大舘細川三淵上野仁木和田等以下御供ゐ召具きられ廿三日江州守山ゐ着御ありゐ程ハ信長木下ゐ仰付られかゝて守山をかりの御座所とゐ川らひ置ゐ〜故あり木下丹羽兩人ハ愛知川まで御出迎のゝため衆〜信長ハ観音寺より守山へ御先ゐ罷越て御着を待奉り御目見ゐ江州かゝれ如く平均の上ハ御上洛とゐ遠ゝぶひと御悦をゐ出けれハ義昭君仰出されゐる様越前ゐ在〜ける時より〜て信長の懇志の忠功とゐひ無双の良将とゐつべく柳營再興乃計畧偏ゐ信長れ手ゐ何り感悦斜ゐゝぞとありしかゞ信長謹でこれとゐも

先代將軍家尊靈の御加護あるべく新公方家御孝心深きぶ致す処ふ〳〵信長何の軍忠かゆべき是ゆうのち〻〻君の御威光を頭ゟ戴きかゆ〻諸士の勇武を勸めゆべくゆと言上〳〵次ふ蒲生右兵衛大夫と家筋と中武勇と中頼母數りのよゆ御目見仰付られ下されゆ様ふと推舉あ〳〵けまべ賢秀を召出さ〻上意あり〻るゟ〻ゟ蒲生面目を施〳〵て退出〳〵その〻ち降参の諸將追〻御前ゟるされ本領安堵の御朱印を賜さてま〻〻在〻村〻神社佛閣亂妨狼藉を停止そべし〻〻柴田森坂井蜂屋を奉行とあされ〻嚴密の沙汰を行それ〳〵かゆ萬民安堵のおりひを法てゟ

か〻〻信長廿三日觀音寺を出馬あり〻湖水を打〻〻〻西近江ゟ〻〻り勢田ふ止宿〳〵廿五日三井寺極樂院を以て本陣とあさる諸軍勢ハ大津馬場松井山科醍醐宇治の邊ふ透間ゟ〻〻陣を取但江州を平均そるとも三好ゟ輩定めて宇治瀬田を塞い〻〻防戰そるふうさゟ〻〻ハ大津日岡まて是非一戰あるべ〻とおりひ設け〳〵ふ何ごとゟもあ〻〻さら〻〻と上洛ゟ赴きあ〻〻ごとハ三好等江州へ打立んと用意を処ゟ將軍義榮腫物の煩以の外まて軍の評定ゟ決着ふ及ばゞ拵〻の内ゟ信長江州を平均〳〵佐〻木の十八ヶ城三日乃間ゟ打落され先陣そぞる大津山科まで推寄〳〵と

聞しかばそづ將軍を退奉り心安く合戰さべしとて
攝州冨田の普門寺へ移しまいらせさて立返り一軍
をんとあるひしよりさやう信長三井寺へ入めひしと聞さふば
攝州へ引退き防戰をなさる評定一決し人のこゝ
都を引拂ひけるばさゝゆる敵あく道ひらけしと

重修眞書太閤記三編卷之七終

三好等京都を退去諸城ふ籠る事
并信長公方を守護し入洛の事

去程ふ信長新公方家御歸洛のゝめ義兵を發し江州
ふ出陣ありし処佐々木承禎同右衛門佐義弼防戰叶
ずして居城を去て石部ふ落行しかば旗下の枝城十八ヶ處
三日の中ふ落去し忽京都乃道筋をゝけるるよりて
新公方家を守山ふ請ド奉り信長ハ湖水をとをる
三井寺極樂院ふ陣を居近日京都へ攻入んと勢揃
ひのりけるふ降參乃諸侍をさゝ加えて都合拵の勢

五万餘騎山科醍醐宇治田原ふ満くたり三好三人衆を京都よりかへり攝州ふ引退きけるを信長定めて勝ふのりて攻来らんぞ〳〵と思ひ防戰の〳〵兵所〳〵乃城〳〵ふ楯籠らんと評義区まつつ山城の國西の岡青龍寺より三人衆の中そ岩成主税助祐道一千餘騎ゟ〳〵楯籠る青龍寺城を山城國乙訓郡神足の南勝龍寺村ふあり東南ふ桂川淀川を廻ら〳〵西北ふ長岡楊谷の山高く京を去ること二里許攝州島上郡高槻城ゟハ入江左近八百餘騎ゟて楯籠る

高槻へ京より六里半あり

芥川の城ゟハ故細川晴元の長男聰明丸を取立三好日向守長縁入道北齋二千餘騎ゟて籠城そ

芥川ハ高槻の西北ふ當る同〳〵島上郡あり京より六里聰明丸のちふ元服〳〵六郎と稱〳〵右京大夫ふ任ず昭元とふ又信長の壻ゟり信意と改めふ〳〵び信吉と改む三好日向守ハ筑前守之長入道希雲の三男小笠原孫四郎長光の長男あり

同國小清水の城ゟハ篠原右京進一千餘騎ゟて相守る

小清水ゟ越水とも書く武庫郡西宮の北ふ

ゆり篠原右京進入道駒雲同彈正入道自遁永祿
四年三月泉州岸和田合戰ゑ三好之虎入道實休と共ゑ
戰死ゑと十河物語ゑ見も然れバゑゑ右京進とゐハ
自遁の子ゑそ後ゑ淡州津名郡郡家の領主田村
二郎兵衛尉經春とゐふ人ありゑ
その外布引瀧山の兩城とゐふ三好方四國の軍兵を籠
置
布引ハ攝州兎原郡生田森の北ゑあゑる瀧山を
尼ゞ崎ゑり申の方ゑ當り六里餘と國華万葉記
ゑ見ゆ
冨田普門寺ゑハ細川掃部助真之三好彦次郎を

大將として三千餘騎將軍義榮君を守護して威を
示ゑ
真之ゑ阿州の細川持隆乃嫡子ゑり三好彦次郎
ゑ豊前守之虎入道實休の長子彦次郎長治とゐふ
池田の城ゑハ池田筑後守勝政
池田ゑ攝州豊島郡ゑあり勝政の父を彈正忠ゑ
いひその父を筑後守充正その父を六郎忠正その父を
六郎佐正その父を十郎教正とゐふ楠正行遺腹の子ゑ
伊丹ゑ伊丹大和守親興
伊丹ゑ攝州河邊郡ゑり尼崎ゑり北ゑあゑる伊丹氏
ゑ加藤次景廉六代次郎兵衛尉景親外祖父池田民部丞

忠光の讓りとうけて伊丹を領しけるより改く
伊丹と稱はれ建武二年のとしか景親七代を藏人
雅盛と云雅盛ハ男子三人あり長子大和守雅興次男
兵庫頭親永三男彌平次永勝といふ親永の長子二郎
親興從五位して兵庫頭ハ任し後ハ大和守と改む
尼ヶ崎ハ荒木信濃守村重
尼ヶ崎ハ攝州河邊郡伊丹と相去ること今里一里餘
荒木村重ハ今年廿二歳あり
されらも當國の住人にして武勇名譽の輩ありさるハ
依く三好の一族等も頼りく思ひ居こりけり扨ま
河内國飯盛山ハ三好下野守政康二千餘騎にく

籠城し
政康ハ希雲居士の四男小笠原伊豫守頼澄の二男
ありり日向守長緣と從弟あり
同國高野城ハ三好山城守康長入道笑岩二千餘騎そ
楯籠る
笑岩ハ希雲居士の弟あり政康長緣の大叔父ハあるる
攝河の兩國三好ハ一味同心して信長の大軍を防ぐんと
待懸らるる時信長三井寺極樂院に著陣ありく
京都の容子を伺ひをらるるハ三好等攝州へ退去
きて由をしうふ聞えけるハ新公方家へ言上あり
よりり義昭君守山を御立ありく廿七日晩景ハ三井寺

光浄院へ著御まし給へあくれば廿八日信長路次より
行粧厳重ふとりよそおひ新公方家を守護しまつり
入洛ほり義昭君を清水寺を仮の御所とふしめくば
信長ハ東福寺ふ陣を定めらるゝ多くく菅谷九右衛門
をいくく軍勢甲乙人洛中洛外亂妨狼藉押買致べからず
ざる旨を觸さ勢らるる爰ふ洛中外諸町人共信長の旨を
天魔疫神も面を向うぬるわどの猛勇暴逆の大将とて
人をとゝふ虫とも思ぬ荒人とのゝ沙汰をしにより
如何ある憂目あらんぞらんと案事居たるかゝる
無沙汰してをまさ却く御咎を蒙るべき様りと恐るく
獻上物取りゝを東福寺ふ參上し御上洛を賀し奉る

その外驢菴
驢菴を遍仙軒瑞策と云刑部少輔和氣利長の
孫春蘭軒明親の二男あり今半井氏の祖あり
道三
曲直瀬一溪道三雖知苦齋と號し静翁とも云
永正四年丁卯の生にて今歳六十二歳あり後ふ
翠竹院とのふ今大路家祖あり
あくびり連歌師紹巴
里村昌休門人あり本氏を松村とゝふ寶珠菴
臨江齋等の號あり今年四十五歳連歌師系ふ
宗祇宗長周桂紹巴と記しまく里村系ハ宗長

宗牧昌休紹巴昌叱と記し
心前昌叱
心前ハ紹巴の門人
並ふ諸藝ふ名を得しゝの共東福寺ふ群参しゝ事
御禮ゝ上奉ゝ信長彼等をかろきされゝ事あり
御家人等を以ゝ禮を請あそんとありけゝふ木下
ゝ上けるハ洛中の町人参上の事ハ君の御容子を
拜しゝ奉らぐやとの心あるべし然るゝ御對面なくハ
諸町人共恐怖して安堵仕るものゝくひなげて御前
へめゝ出さゝ給御懇の御意もいそゝ洛中静謐の根本
なるべくいと言上しけるにより何樣さる有へしと

思召れ頻ゝ町人等を召れ安心して家業をそけ
いへと仰出されそめくゝ下さるゝ物ありけるゝ我
そめて人のいつまとかそり活達の大將このゝと
褒詞をそ歸りけるその中ふ紹巴ハ扇子二本
臺ふのを自身是を持参しゝ御禮ゝそれハ信長
御覽ありて彼を世ふ聞えし連歌師あり一句
所望をぐやと思召扇を取上給ひ
ふゝん手ゝ入るゝ日本のことゝ
とありゝく是ふ付いへとあしゝハ紹巴とあえて
まひりゝ千代萬代の扇子をそ
と付けまいハ信長殊ふ感悦まはしまゝも祝を

りのかふ流石ありとて賞美あり物多く賜そう
やゝ〳〵親〳〵く召をられけりそのゝち信長洛外の
容子を尋ねのふる三好一味の輩攝河兩國の間ふ
城を構へく揩籠り防戰の用意怠りなく嚴重う
武威を逞くして相待ようを告けれバ日を移さゞ
馳向ひ退治あるべしと仰られるを藤吉郎申て
中しけ〳〵三好一味のものゝ共ども河州攝州所〳〵の要害ふ
揩籠りゆあるまつれぬを急よ征伐あるべきを近比
難義よゆへ〳〵殊更攝州ハ武畧よ長し兵士多く
ゆへい等閑の敵ともゞ〳〵めにべうゝにその上味方ハ
長途よ勞ゑて兵士疲り實よ大事の軍ふてゆ

若一城を圍て拔得ぞ隙入いうち諸城より討出或ハ横
をせめ或ハ後をさゝへぐりゆうそんす味方ハ不智案内の
敵地あり敵ハ自國隣里の阡陌あり進退不自由乃
處と見そなし爰のつまり彼處の切処をふさゞれハ
危ふき戰よていべしされバゝうに兵を動うさゞ
軍威を示し戰そうにして城〳〵を降そ樣う御計ひ
なゝんと肝要ふゆと申上けゝ信長その謀いうふ
と尋ぬるふう藤吉郎承そう左ゆ攝州の武士
の中ふく荒木伊丹池田ハ累代の地頭よて然も
名譽の勇士ゝ然るう三好ゞ催促う從てものゝ
城よ籠りゆゝども本心三好と共よ存亡を同じ〳〵

きんとそおりゝゝなるべし只今新公方家の御味方よ
ゝ参りなは本領安堵相違あるへゝしかつ軍忠ゆ
へ恩賞の次第ハ請よ依べしとゝ送をるゝ
彼輩かるゝゝ新公方家御孝養の誠心を感ず
叛逆一味を恥く義兵與力の志を起しゝべくゆ
然らハ攝河の諸城主日を追て約と變し心替り
の者多くありなん時御出馬ゆ者可然ゆそんと
申上けるよりゝ信長大よ感服あしのひそのあれる
りを撰それまづ攝州荒木池田伊丹の城ゝへ遣し
新公方家の御教書へ信長の書狀を添く送らを
るひけるゝ案の如く伊丹荒木ゝ元ゝ三好等ゝ

奢侈を厭ひ叛逆を惡ゝども自身の力微弱ゆゝく
ゝれを制する勢なけれハ止をを得ずその下風ゝ
立るのゝゝ形りけるゝゝ御教書と織田家の添
書とゝを得くのち忽よ心替アゝ御味方よ馳加ゝ
軍忠を勵ゝゝべき由を答えゝけるに池田ゝゝハたし
ゝなる返答ふ及ゝゝ池田ハ三好の親族なれハなゝゝ使節
立かゝり斯と言上そ但信長よりゝの使節いまゝゝ歸参せゝる
間西岡の青龍寺の城をそのまゝゝ置るゝこと無念の至
なり若者ども走り向て只一ゝゝゝ攻落をゝと下知をゝれ
ゝれハそゝりゝとの兵士三千餘人青龍寺へ押寄無二無三ふ
攻ゝりゝるゝ當城ふ籠アゝ岩成主税助三好

三人衆の中にて智勇勝れ一り抜るれい防戦の手當もすぐ尋常ふ超さり籠る処の一千餘人いづれも似たるを友として凡者なるを私ハ鉄炮矢石を飛し てよく戰ふ寄手大よ打ゐやはられ疵を蒙るその數多ありく中ゝ乗入べき事ハ有のひよりに日既よくれしかども寄手引退うんとるをぢ猶虎口まあるを岩成きつと見くいぎ此り抜共を追ちらしべしとて五百餘人を勝り寄手の責詰塀際り集りける後へ廻り信長よりの加勢ありと呼そり屋ゝ近くあるやいるや後より鐵炮を打みを入く突立るれハ寄手の者共大よ驚きさわ

如何ゝと狼狽まはり闇さハ暗し敵味方の分ち形く散乱しふり城兵とハ合詞を以く同士討せぢ追詰く寄手の兵士を八方へ打ちらし勝閧を揚く引返せば織田方ありひの外よ敗軍して京都へ逃登りけり

岩成主税助青龍寺籠城の事

并木下秀吉岩成祐道を説事

信長ハ東福寺を本陣として諸方へ下遣ひありけるハ青龍寺へ向ひし味方の兵士散くり敗軍して逃歸りしかハ信長大よ怒り即時よ大軍をひく責破るべしと有けるを木下藤吉郎進ゝ出くゆける様

夜中とゐひ案内知らぬ土地なり味方大勢なり共
その功ゆゑ先手の敗軍ハ敵を侮て軽んじゆゑ
起こし謬かり岩成主税助ハ三人衆乃内ゑても
抜群の勇士なりと承る容易き者ゑひ然とそ
捨置べきもあらぬ明朝早天り御旗を差向
られ責さ勢ゑひ然るべしと申上けるゑより其夜を
かゝく休息ゆり暁る廿九日の拂暁り總軍一同ゑ
出陣なるゑひ新公方家の御旗をもち出し
青龍寺を踏潰るべしとく西岡へ押寄ゑ信長の
本陣を桂川の端なるゑ五萬餘騎の勢なれ
野なる山ゑも充満なり

東福寺より西岡を申ゑ當り二里ゑ遠し桂川
の西涯もぞゝ川の東なり青龍寺より一里許を
隔ゐと知へし
青龍寺の城を十重廿重ゑ取巻なる旌旗の朝日ゑ
輝ける勢もびゝしく城中ゑ籠る処の兵士ゑ体を
ゝく大ゑ怖ぢ斯ゝの大軍をして攻立られゑハ
味方ゝつゝゑ一千餘人何とゝく防戦ハふべゝんや終ゑ
攻卧らゐんと疑ひるゑと心臆して茫然たる氣色を
岩成ゝてとり少しも屈ぢず寄手大勢なりと雖
さのゝ恐ろしきとかハ命ハ二ゐるきりなを一度討死
してのちまゝ戰ふべき事やある斯要害ゑ楯籠りし

をしめより切死よ死んりのとハか様くありひ設け
こゝあ〳〵ぞや去ハ大軍を引請く目覺しき働きし
名を後代ゝ残さんこと生前死後のおのひ出とゝ〳〵
此戰場を迯延く何ゝとの榮華を開くべきやたゝ
疵を請廢人とゝり青龍寺崩れの臆病者といそ
れんも術ゝあるべし早怯乃振廻しく汚名を残し何ゝ
きんと厲まし けるゝ諸軍勢力を得く必死と覺
悟し持口を請取命と限りよ防ぐんと勇〳〵けり
信長ゝ昨日多く味方を討をく遺恨やるゝ
憤ゝとゝ只一息ゝ攻落をゝとあきらめを木下
種〻よ制し慰めけるゝ城中の体を伺ふり

皆く必死の覺悟と見へたり味方の大軍を恐れぞ
静まり返りく籠城するのたとゝ窮鼠の猫を
噛勢ありと思ゝ呂ゝ〳〵を無体ゝ攻ゝ
味方も多く損ぜ〳〵此一城ゝゝ何様
らもあるべ〳〵どゝ此外よあまゝの敵城ハ勢を
そこしもたゝひゝ方然ゝ〳〵此城よ籠る如き
死武者をハ謀畧をゝ以く欺ゝれゝ事專一よ存ゝと
言上をゝあゝその謀いゝよあきハ然るゝらん計ひ
やをと仰らゝによりゝ秀吉我陣よ返ゝ浅野彌兵衛
よ策をゝ含めけをハ浅野心得く直よ只一人
青龍寺の城門みゝゝり信長ゝりたく一言ゝ入き

とのありて使ふ差れきりてやく城内へ入るべと
呼てまこへ門を堅めて兵士岩成ふかくと告岩成聞て
是必降参を勸めん爲の使なるべしと察し士卒ふ
下知して答えさせける樣敵の大將信長より別の使者
を受つき由緒ありて然者聞く詮なし兵士志を一りふ
して城を守るのひざてやく寄られひとゝ申ぶしやと
答つさをけまへ浅野承りて攻からんとき勿論なり
但敵味方の間まてる使者を通し詞を交すこと往昔
より今ふ至るまでく掛の例多し何そ一向ふ敵の使を
追返すへき信長の意を城主の振廻を感しまふ
あまり但一言を通しその志を知きやとの趣意

を以て其罷向ひしを對面まも不及一途ふ合戰のこを
急るを近比笑止千萬ありとて岩成はその詞を岩成ふ
まく告けるにより岩成はく思案し實りと思え
おるやその男是へといふまより城門を開いて浅野と
伴ひ岩成ふ對面をしむ岩成浅野ふ向ひ何事ふ
よりて來りまつぞと問浅野申さく御邊當城ふ
楯籠を防戰の用意行届き士卒意を一致して
死をあのそれる体なる感ふ堪るありさ程共
その勇氣血氣ふてやられいやてはしく思慮浅く
ありそれふり城を枕ふ討死をるを名譽とそるる
葉武者の上ふて然るへれども御邊もそでふ三好

一類まて三人衆といへども更に非ずや士卒まで共なり
さしくに討死し寄手の功を勸めて味方の氣を落し
なりと抑大將の本意ハ城中の兵士千餘人ひとしく
命を落しても三好一家の弱をすくはれんと一族のこれ
これも惜からぬや信長軍を起してよりこのかた
暴に殺すことを好ませられず御邊にも離城に
籠りて討死せんよりハ手勢を引率して富田
高槻の勢と一所になりてかさねて軍なさんや
某がさしくに來るを降参を勸むる說客にあらず御邊
の心味方の城へハ路遠し援くる勢ハなし潔く
大敵に當りて死を輕くし名を末代に遺さんと

おのれ〳〵おもへバされども實ハ引後れて爲方盡
故と推量せられし信長の眼力よも違ふじ本意乃
如く退去あるべくハ路次の狼籍なき様計らひ
すべしとのふ岩成浅野が中条を聞て暫く俯き
案じけるが屋しばりて浅野に向ひ實に信長の仁心
勇士の本意をきまりすく承なり近比祝着仕りてハ
何様仰の如く味方に引取あれしこの城にて運をひら
くべしとハ不存ゆへ共弓矢とる身の哀しささて敵に
引受て何とて後を見せるべき一向討死を覺悟仕り
さいはひのことに御推察の通りに然るうへこの城をさけ
退て味方の者共と一緒になりゆかんと本意にはいへども

路次そるるゝ事ぐりてい無事ゝ退ゆさんを難義ゝ
存いそれぐゝ御計ひあゝバ速ゝ退散仕るべくいたゞ
それゝ付一川の所望ゝられありい籠城の兵士等う疑心を
散さんゝめ御送りれ勢少く被仰付い共ゝゝ名字の
聞えい旁五六人此方へ御越ゆく我等と一所ゝ御退い
様ゝゝゝいともいづれゝてそれい御計ゝよるべくを
ゆにより浅野それわどの義御懸念う及びいはゝ
まづ我ゝの旨ゆて早く取てゝひゆくきにくいとて浅野ハ
本陣へ引返そその跡ゝて岩成ゝ一族等ゆ様ゝるとて
軽ゝゝゝ退散の返事ありしゝゝと問ハ祐道打笑ひ
是信長昨日の敗軍ゝ懲て當城を攻るとも容易く

落べくゝにゝゝや落得ゝゝも士卒も多く損そ
と思惟ゝ偽ゝく當城を退去さを無事ゝあれを
請取途中ゝて計らんとありゝれゝ我ゝさまゝう
残り居ゝらんより攝州の味方と一緒ゝありて存亡を
共ゝをんそハそゝめよりれ本意あれども敵を目ゝ
餘る大勢ゝ如何るる計策をゝつらんも推量られ
ゝハ送りの勢う名字知らる士を五六人同道をんを
所望をゝゝあれい途中効あく退得る迄ハ質と
ゝ味方の地ゝ入ゝらハその者共を打取く土産ゝ
せんと心付て望ゝゝ信長ゝられをたゞりて退きんと為で
計ゝゝ信長ゝ

我まゝ信長をそゝりて途中を安く退去しかつ戰ひ
〳〵一族中への手ゝやげまで計ゝれハ面〻命一切
拾ふゝりとあるゝとて勇ゝあゝり

重修眞書太閤記三編巻之八終

重修眞書太閤記三編巻之九

岩成祐道青龍寺退城の事
并木下勢芥川より岩成と合戰の事

淺野彌兵衛尉青龍寺の城ゝ至り岩成主税助ゝ
對面し開城退去の約をゝして歸り秀吉ゝ岩成
ゝ所望の趣を語りけるゝ藤吉郎打笑ひ左ゝ云
ふるゝ〻ゝれ我計策圖ゝあゝゝりとて大ゝ悦ひかゝゝして
淺野ゝ口狀をゝ含め敵城へ遣ゝけれバ岩成
ゝゝやゝふ出合ゝ如何やといふ淺野答ゝゝ様御所
望の旨信長へゝてゝハ安き御事ゝゝ此方より

御邊の本意を推量して勸めし所あり何と哉
腹黑なることなとはなきされども諸卒の心を
休めん爲との所望あり元よりそれよ及ぶことも
なれども多くの人心を安堵さをんとの義あれハ
御邊落着の處まで信長の一族并ニ老臣等の一類
を見送りの爲かつる人質乃心ニて遣そ〳〵べ〳〵との
ことなりけ〳〵と答へ其の外ニも所望のことをいそ〳〵越
るべ〳〵と仰を出されけ〳〵と述られハ主税助心中ニ
大ニ悅び御懇志の條〳〵盡〳〵かたけ〳〵以く
必死の我〳〵助命あ〳〵ハ〳〵の士卒等安心
の爲とありて殿の御一門并ニ歷〳〵の御一族衆を

以く送らをとのそんとの御意さりとハ恐入〳〵左ハ上は
速ニ開城仕るべく存ハ願そくバそやく御計らひハ様
御披露給そるべ〳〵とやけるみより淺野やけ又先以
く退城の事早々御得心の趣使者ニ立ハ某迄も
一面目ハく滿足仕りハ然ハ送り乃者をめ連參りハ
そんとく城を出木下の陣ニ歸り岩成ニ返答ハ
よ〳〵を披露あ〳〵そらば木下さらハ我手の兵士の中
みく小市郎秀長ハ色白く人品のよ〳〵是を信長乃
子と名付て遣ハべ〳〵とて衣服を改めさせ堀尾茂助
蜂須賀又十郎青山小助大澤主水竹中久作松原
内匠此等を柴田佐久間林丹羽その外老臣の一族と

稱し夫くゝ名を付くゝ何とても小具足ばかりゝ短刀
打刀の体ゝ出立従者をハつれず只七人浅野と共ゝ
城中ゝ入くゝ有りくゝのよし告れハ岩成仕ゝ
たりと悦ひ従卒どもゝ退城の用意を急ぐ勢
我身ハ浅野を迎え入て對面し信長の御芳志貴邉
の懇切忘ぬかくゝ覺えと埃授終りくゝ七人ゝ
衆ゝ近付味方の地ゝくゝ各ゝ御送りの為ゝ御越
被下ハ条御苦勞ゝ計ゝと悦びゝくゝ伺ひ見るゝ
如何樣凡人ゝ有ゝ見えしかハ岩成ゝ謀り課
しと思ひらの上ハ片時も留まるべきゝ有らゝ直ゝ
退去仕りハんゝ有れば浅野ハ本陣へその由を御傳へ

ハへとゝにゝりハゝ有ゝも御心静ゝ御退ゆへと會釋て
浅野ハ陣中へ引返ゝ岩成さくゝば退去仕りハべとく
一千餘人を三手ゝ引分七人の衆を真中ゝ引包く
聊も油断ゝく其の日未刻ゝ青龍寺を開きけれハ
有ゝ城へハ木下浅野ゝ五百人の兵士を添て入替ら
くゝり岩成ハ服心の郎等を呼近付汝等此邊をも
斯く押行芥川近くなりゝハこの七人を生捕べし但
敵地へ膽太くも質とゝりて來るゝわどの者あれハ相應の
勇士なるべくゝされども不意ゝ欺きゝらハ何の事も
なるまじ我相圖を誤とゝりれとゝ含て路次を急き
けるこの時木下信長の御前ゝ出岩成を無事ゝ退去

さ勢い事無御残念ゑ思召さるゝ〜然とも之の城一刈ゑ味方の兵士を損亡をゝめんを新公方家御手、初の軍ゑ長けるくい間かゝ計りいく城を請取い共、之の城ハ味方より攝河二州へ取うけいもんゑ第一乃足溜とゑ思べゝ箕作和田山ゑ抜群ゝて又岩成を道ゝいへとも左のゝ長き日數ゑあるべゝに攝州へ遣をはゝ〜使節歸り来り伊丹荒木等の便宜ゑより、又謀を行ひいゝ日あゝに御旗下へ召寄めるべきにくいと言上ゝ我陣ゑ歸り蜂須賀小六稲田大炊助を大將とゝ〜二千餘人の兵士を授け何ゝも野武士の体ゑ出立を徑を廻りゝ芥川よりゝゝに埋伏させ

今やゝと待つまもなくゝ岩戎主税助めゝゑもんゝ芥川へやゝ急くゝわどり既ゑ山崎近くゝありける時數千の野武士潮のゝくゝか如く打ゝ出落人と見るぞ物具ぬけと呼そりゝ為ゑ岩成ゑ士卒大ゑ狼狽し扨て信長ゑ欺うれゝゝ口惜き次第かゝとて彼七人衆ゑ向ひ詞れハ七人衆いゝゝ信長何とて各ゝを欺きやゝ為き今討出る輩ゑ賤武士なれゝゝ心を静て見給へや織田家の印付るゝ一人もなくゝその上ゑ甲冑を脱ハ命を助けんと云を野武士の證據ありゝ信長何の為ゑ面ゝこの兵具を奪ゝをいへき然あらゝ我ゝハ各ゝを無事ゑ送り届くべき為ゑ信長より

付られし所なれば其の道を妨くる者をその儘
棄をくべき道理なし〜いで一働きして道を開きい
とゝにぞ岩成何さるこの者共も野武士なるべし
七人の衆はつづ働きを抜の勞をもて乗して生捕んの
ちと思案し即所望ふ任をける七人衆ハ岩成う
手の者ハ持うけける鎧追取く真先ふ進く大勢の
中へ會釋もなくかけ入手を碎く戦ふを見て暫時
よりも味方ハ野武士等を切拂ふく七人ののれを
討ふ続けやと呼そうなら馳向ハ野武士
なぐるも敵も大勢抜の上ふ名を得る蜂須賀
稲田あり岩成う勢を真中ふとりまき免餘さと

突立切立戦ふるどふ一千餘人の者共周章ふるあき
途方ふ暮ふ抜の間ふ彼人質とをの〜たる七人の
者を見失ひをも主税助もそ〜めハ實ふ野武士
あるべしと侮ふ居さりしふ軍乃掛引尋常あら
ばるをく是凡者あ〜ば手をあらさでハ叶ハしと
ありひ自身馬を躍ら〜敵を撃んとそれハ敵急に
人數を纏め今まで是まで〜引取るべ〜と觸廻す
操引ふ引上く備をかさねふ岩成も如何ある謀の
ほ〜んも知か〜〜旦日る夕陽ふ傾けハ過あらん
とあるひ兵をまとめ早く川を打とる〜味方を
改めるふ三十餘人討れ〜手負百餘人ふ及び

剰へ浅野う伴ひ来いる七人のものをさへ行衛しれぬ
なりつるこの悔しさと齒をかみて怒れどもその
為あけなく無念あるべき芥川の城へ入らりけを又
かの七人衆を岩成う勢の真先へ進んで軍をする樣ふ
るそのまに味方の勢ふ紛れ入りしは岩成う手の
者を拔らの景をさへ見失ひ敗走木下が計ひ
にて蜂須賀稲田を野武士軍して岩成う手のもの
三十餘人う首を取七人衆を取めへさてあき連て
本陣へ歸りきれいはゆる青龍寺城乘の印ありと
号して信長のあそこ清水を桂川の陣所へ獻ず
かい信長大ふ御感あり夫より青龍寺へ移らを

ものひとの競ひふ攝州へ發向ありと仰られかるも
木下諫めて先日遣ちされし使者を待ものふり程
あて使者立歸り荒木伊丹の兩人異議あて御味方
ふ参るべき由約束仕りしい由を言上して池田筑後守を
御返答定うあるべしとふより打棄上陸しいとの趣
具ふ演說なりけるより木下大ふ悅び然らば攝州
退治手員ふ及ぶまし明日早天より御出馬ありて
然るべくしと勸めをにより信長ふも益悅喜
ものふ清しその夜を諸軍勢を休息なりのふ
永祿十一年九月廿九日青龍寺落城岩成降参ぞ
織田譜う見えて後ちも岩成を降らに城を開き

退しゝ是年信長世五秀吉世三蜂須賀正勝四十三

木下一計攝河の城く落去の事

并三好一黨四國へ退去乃事

攝州伊丹の城主伊丹親興あゝ國尾ヶ崎の荒木村重新公方家の御教書ふり三好方ふ叛き信長ふ一味し木下ゝ示せし謀りゝを村重ハ兵船數多用意して尾ヶ崎の沖ゝうかべ大軍海上ゝ列ひつる景色を見おつく時刻をまつ伊丹は手勢三百餘人を勝て投焼松焼草の用意し廿九日の霄の淸ゝ兵士ゝ兵粮つゝをゝ夜半ゝ兵庫をさして進發せこの時信長ハ西岡青龍寺の城ゝ淸しく

五万餘騎を引率し夜いまゝ不の暗きに出馬なり木下信長の馬乃前ふ進く今朝の御出陣ハ天下平均の御首途ゝて ひゝハ一同ふ勝鬨を作らき味方の軍威を御示し然る屬しとゝ上げるゝ信長尤然るべしとて諸勢ふ下知あゝ ゝハ承るとゝ申もそゝめゝ喧とおゝ先いく鬨を作るゝかハその聲山谷ゝひゝきそゝ駭しあんど云も勿くおろゝ形り三好方の諸城ゝてこの聲を聞く膽を寒し驚き怖を生ける折節伊丹親興三百餘騎ゝて兵庫へ打て出新公方家の御味方ふゝを加ゝり兵庫神崎の兩城ふ火を放く焼立その上山陰山陽の諸將いづれも新公方

家の催促ふ従ふ〳〵切上る由を觸さ〴〵かハ所〳〵ふ立らるゝ三好方の城主共所候を出してあれを聞もるふ實も海上ゟ數百艘の兵船西宮尼ヶ崎の沖中ゟ乗ふ〳〵漕あ〳〵べ西國方乃旗さ〳〵のれその負〳〵らぞ立ゆ〳〵きゝゝり此勢追〳〵寄來たらんふハ何百萬騎とつふもと計るべ〳〵に御用心あるべ〳〵と注進せかハ三好一味の者共前ふハ信長の大軍近〳〵と寄て勢猛火の原野を焼ゟ如くもゝひ迹くべゝらに後ふハ西國の兵船海上ふ充滿〳〵たり免角もる内ふ四國の通路を塞このれあ〳〵ば如何せべきかく〳〵て此邊ふて敵を防かんことゝの外難義ふ〳〵

一先本國ふ引退き軍勢を催ふ〳〵かゝるゝて攻上らぐやゝと臆病風ふさゝそゝれて篠原右京進冨田の普門寺へ馳参り細川真之三好彦三郎長治ふ對面〳〵けるい將軍義榮君御腫物の御惱も日〳〵ふ重らせゝるふ所ふ敵東西ゟ寄來たりいその中ふて御介抱を行届きゝ中ふ〳〵片時もゝ〳〵や〳〵阿州へ御下向あり御心静ふ御保養ふ〳〵ふさゝば然るべ〳〵いそゝら御味方のゝれ共も追〳〵歸國仕りいべ〳〵と諫めゝらべゝづめも元と同心〳〵その日己刻過ふ用意そゝ〳〵り整へく御舟ふ將軍を扶け乗ふの〳〵を細川真之三好長治御供〳〵て阿波國へと出船ゝ〳〵その〳〵ち篠原ハ早馬を

りつく味方の城々へこの由を告こうるふより芥川の三好日向守長縁入道北齋も城を開きてあるべく阿州を志し出帆せんと云けるを岩成主税助聞もあえず西國の軍勢信長ふ一味して馳上るとつふるを偽るべしその極るはは近代將軍家の御催促ありる時ぞに上洛せぶり者共ら何とて信長ふ荷擔せぐあれこそ信長の得うる反間の謀なれ信長の勢多くて四萬ふ過ぐその外ハ近日ゆゑ集り勢降参與力の者なりこの恐るふたらぶ味方攝河の間ふ數城をかまへなるゝ一戰ふも及ぞに退去をんと後の聞もいくぶるり信長いふ強しとも城を根本として大手の軍を

大事ふ持あるへ合戰半ばふんとゆゑ城々よりを切く出後を絶て焼立は不知案内の美濃尾張ハ兵士退屈して機を落せべし拵の氣色を見濟し夜討をかけるば一舉ふ織田勢を切崩し信長を討取べきなりそもそも又當城として軍難義なるべば小清水の城ふ引籠り信長勢をかゝへ引寄その〳〵ち河州高屋飯森の城〻より討く出一手ハ信長を押へ一手を直ふ京都へ攻上る体なるべは信長暫時も猶豫なるべして軍を返しゆへ拙ら時跡を慕ふて追討をば十分の勝利を得全疑ひなるべと計らひけるとも岩成青龍寺を謀謀

落されしわざの心まて何のよろしき慮らはるべきと
祐道を信ぜる人はなりとも〻しかハ實よ然るべきとも
とを用ふるもれあく何まても本國へ引返し再度
軍を起んと云義をもれく主張しけるふより長縁入道
岩成ふやけるハ御邊の思慮まとみ然るべくれども
將軍まそでよ御退去の上ハ諸軍勢の心一致ふらぬ
いくんや西國の兵船兵庫の沖ふ着とり〻由も
正しく人の見とるる処と信長一味よあるべくとも味方の
勢ふハ決して はらゞ然者かく區々ある勢ふく
いくでう大敵を防ぎ得べき無益よ人數を失そん
より本國へ引退ぞくんを十全の計策あるべし

たとひ京都を失ひとり共四國の地を全領したくんハ
猶一方の大將軍といつるべしあふ久しく籠城して
四國まて失ひるハ後悔まそるともその詮あるはとふ
詞もいまゞ終らぬ処へ高槻の入江左近織田方ふ降参
しけるふうり是を案内者として信長の大軍寄來
あるハ御用心あるべしと告とりしわどよ長縁も今も
たまりかる細川聰明丸を伴ひ取べきものも取ずして
早く城を出是もその日ふ本國まて出船ハ岩成主税助
大ふ怒りまれど未練臆病まて何とく信長と對くの
軍のなるべきやといぶやきあるる我勢ぞうを勸めて
敵寄來らハ快く防戰まべしと待うけしが高槻ハ

入江降参して本領を安堵し信長の先手ふかをうて
進發するとの風聞きあるなるいまゞ正しく旗巻
手を見つゞ是ハ木下う諫まよりく伊丹荒木の謀
整く三好方あそて騒ぎて本國へ引返したれども
この序ふ攝河の城くと急ふ打落し平均せんとく
ありひもよくくは間たゞ猛威を示され郷民を懐け
い様ふ御計策ありて然るべしとやによういうまも
寛宥ふ仕置をなすしるひけまバ攝河の両國今まで
三好の惡政ふ苦くしの再生のおのひをなして從ひ
靡きけを夫等う三好一味の城ふ籠もし兵士を驚
かさんとくかくハもぐしく言ふらをへ河州高屋

飯森ふ籠もし輩
高屋を河州古市郡高屋村ふあり安閑天皇
御陵の上ゝと本丸とし八百八狹間の城塁を築ゞ
いつり飯森山ハ河州讃良郡まあり
篠原ゞ知らをよう将軍四國へ御渡海はゞ西國
の勢ども海陸より攻上るようを聞く茲抑いうなる
世間ぞと氣も魂も身ふそそに驚きさをきける中ゝ
飯森の三好下野守政康青龍寺を責落され芥川を
落うを高槻ハ降参し将軍ハ四國へ落さをるふとゝ
勿く此城ふ籠りく防戦かふふ屋くとゝもありそれぞ
いそぎ四國へ引返くし一族と一川ようなくぞやとおもひ

高屋の城ふありける三好山城守康長のもとへ
ゆ通し同道をんと勸めかどを康長ハ思慮ありふ
りけるそ退城然るべきを堅固よ籠城しまへと返答
きしふ政康心決きぢ案ず居ける所よ西國より大軍
攻上ると聞今ハ高屋ハ山城守へ通達ゆ
及ぶ手勢を率し城を開き落ゆりけり山城守も
はの由を聞攝河の間よそ我城一ゆのこりゆを何とそ
合戰なるべきや然ハ我等も退屈しとく康長も
高屋を落く行方しれぬかましのちハ河州よ敵と
いふれ一人もなく平均り新公方家ふ從ひける
ふより小清水ふ居ける篠原も力ぢとさ〳〵バ

城を開いく四國よりこり一族と共よいくもあんと
おゆひ定め芥川よ落止まける岩成ゞ許へ味方の城く
一戰ゆを及ぶ落失く防戰の心あ〳〵拙の上ふ
國人等心替ア〳〵ゆ思ばく永く在陣かゆを〳〵ぢ
是ふより某も歸國仕りゆ御邊ゆも拙ゆ地を
御引取然るべしとゆ送り十月二日早天ふ篠原
小清水を開き落〳〵かバ布引瀧山もとりふ明退
ふりこれ注進を聞く岩成も勢んくかく獨語く
芥川を引退く是も四國へと落行〳〵ゞよ信長やて
芥川へ入替りさて新公方家ゆも招請ゆけるふより
義昭君ハ所〳〵の城〳〵御覽のゝち小清水の城へ入をゆふ

攝州河州の城々を攻らるゝに合戰數月まで勝敗まゝ定めがたかりしを木下の計より一戰ゝをとるゝに一卒を勞をゞ二國まゝ御手に入けるを目出度なんどゆゝしかりゝ

織田譜に廿九日芥川城を攻十月朔日城主細川六郎三好日向守退去二日小清水城をおとしいれ義昭小清水にあり信長芥川城に入給ふ進で池田の城を攻とゝり

重修眞書太閤記三編卷之九終